

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2019年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 現代心理学 研究科 臨床心理学 専攻			
<b>研究代表者</b> (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 (学生番号: 18WX001K )		柴原早紀 印	
<b>指導教員</b>	所属部局・職		氏名	
	現代心理学部・教授		林もも子 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	<input checked="" type="checkbox"/> 人文	社会	<b>個人・共同の別</b>
				<input checked="" type="checkbox"/> 個人
<b>研究課題</b>	母親の自己愛的脆弱性とアタッチメントの関連			
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・共同研究者) ※2020年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名	
	現代心理学研究科・臨床心理学専攻・博士後期課程・2年		柴原早紀	
<b>研究期間</b>	2019 年度			
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円			

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、成人期女性の自己愛的脆弱性が子のアタッチメント安心性にどのように関連するかを検討するために、質問紙法、及び面接法による調査を実施した。子のアタッチメントの安心性に影響する媒介要因として、母親のペアレンティングを想定したモデルを仮定し、面接参加者にペアレンティング測定のための質問紙と面接調査も実施した。量的分析の結果、母親の自己愛的脆弱性と子のアタッチメントの安心性変数、及びペアレンティングにおいて、有意な相関が見られなかった。しかし、ペアレンティング尺度において天井効果、及び床効果が見られたため、質問紙法によるペアレンティング測定の限界もあった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 自己愛的脆弱性 } [アタッチメント] [母子関係]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

自己愛に関する理論は現在大きく 2 つの支流に分かれており、アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association 以下 APA) の精神疾患の診断・統計マニュアル DSM-III (APA, 1980) においては、Kernberg が示す自己愛性パーソナリティ障害のタイプのみが診断基準として集約された (川崎, 2011)。しかし、DSM の記述だけでは必ずしも十分でないことが指摘されている (Cain, Pincus, & Ansell, 2008; Kernberg, 1998(佐野監訳 2003))。上地・宮下 (2005, 2009) は Kohut の理論に基づき、自己愛の障害の過敏性・脆弱性の諸側面を考慮した概念である自己愛的脆弱性 (narcissistic vulnerability) を、“自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であること”と定義し、自己愛的脆弱性尺度 (Narcissistic Vulnerability Scale 以下 NVS) を作成した。

精神分析理論において、青年期は自己愛の高まる時期といわれている (Blos, 1962 (野沢訳 1971)) が、実証的研究において、成人期の方が自己愛と親密性形成の負の関連が青年期よりも高いことが示唆されている (原田, 2013)。この原因として、自己愛による誇大的で要求の高い態度が他者との親密性形成を阻むこと、親密な関係の持ちにくさを補償するために個人内の自己愛的な誇大さが強くなったことの両方向の可能性が考えられる。また、成人期におけるライフイベントの 1 つとして子育てがあるが、自己愛と養育について、宮下 (1991) の大学生を対象とした研究では、親の養育態度と子の誇大的な自己愛人格形成に、親子の性別による差異が示唆された。しかし、上記の研究はいずれも自己愛の誇大性に焦点を当てた研究であり、自己愛の過敏性と、成人期の親子間の親密性形成について検討した研究は見られない。

一方親子などの親密な対人関係に関する理論にアタッチメント理論がある。アタッチメントとは、Bowlby により提唱された概念で、危機的な状況に接する、またはそれを予知し、恐れや不安が喚起された時に、特定の対象との近接や接触を求め、主観的な安全の感覚を回復、維持しようとする傾性である (遠藤, 2007)。自己愛とアタッチメントはいずれも理論的には発達早期の養育者との関係を重視しており両概念の関連が指摘されている (Fonagy 2001, 遠藤・北山 (監訳) 2008)。近年の実証研究として、Smolewska & Dion (2005) による女子大学生のアタッチメント・スタイルと自己愛の 2 類型との関連についての研究や神谷・岡本・高野 (2013) による大学生への研究がある。しかし、上記の実証的研究はいずれも青年期を対象としたものであり、成人期以上の自己愛的脆弱性と、対象者の親密な他者との関係性に着目した研究は見られない。

さらに、母子間アタッチメント関係の安心性に関わる要因として、Ainsworth et al. (1978) は、母親の養育行動における敏感性 (sensitivity) を示したが、Pederson et al. (1998) の研究結果では、敏感性は AAI と SSP を調整する変数として 17% の関連があることを示したに過ぎず、この変数のみでは説明が不十分であると遠藤 (2010) がまとめている。Bifulco & Thomas (2013, 吉田ら (監訳) 2017) は、パートナー関係は母親の家庭でのペアレンティング能力を十分に発揮するために重要であり、協力的なパートナーが母親のペアレンティング能力を改善させるのに重要であるとともに、逆にカップル間の否定的な相互作用は乏しいペアレンティングや不適切な養育のリスクにも関連すると論じている。Bifulco & Thomas (2013, 吉田ら (監訳) 2017) の研究では、母親のペアレンティング能力の低さとパートナーとの深刻で慢性的な関係の問題が、子どもからの報告による虐待とネグレクトを説明することが示された。

本研究では母親の自己愛的脆弱性を測定した上で、母親自身のアタッチメントの安心性、ペアレンティング能力の高さが子のアタッチメントの安心性にどのように関連するかを明らかにすることを目的とする。仮説として、自己愛的脆弱性が高い母親でも、母親自身のアタッチメントが安心であれば、ペアレンティング能力も高くなり、子のアタッチメントの安心性も高くなることを検証する。

**方法****対象者**

児童用質問紙への参加者は小学 4-6 年生児童 579 名で、うち母親用質問紙の提出があったのは 179 名であった。これらの内、有効回答数は 169 組であった。

さらに面接調査への参加者は 37 名で、そのうち「初婚でパートナーと同居、第一子が 7 から 12 歳」という条件を

**研究成果の概要 つづき**

満たす者は22名であった。

**場所**

子に対する質問紙調査は小学校にて実施した。また、母親、父親に対する質問紙調査は子,または母親に返信用封筒とともに持ち帰り、自宅での回答および郵送を依頼した。母親に対する面接調査は大学の実験室にて実施した。

**手続き**

大学近隣の小学校に依頼し、子に対して質問紙調査および母親向けの質問紙、返信用封筒の持ち帰り調査を実施した。母親に対する質問紙の最後のページに後続の面接調査の募集チラシとメールアドレス記入欄を添付し、質問紙回収後、メールアドレス記入者に面接調査およびその後のパートナー対象の質問紙調査についての詳細、及び倫理的配慮について説明した。メールでの連絡において、協力を承諾した母親に依頼し、大学の実験室にて面接調査を実施した。さらに、面接調査に参加した母親に、父親に対する質問紙および返信用封筒の持ち帰り調査を依頼した。

**質問紙および面接の内容**

子のアタッチメントの安心性を測定するために KSS 日本語版 (中尾・村上, 2016) および性別、学年、年齢のフェイス項目からなる質問紙調査を実施した。母親に対しては、自己愛的脆弱性を測定するために NVS 短縮版 (上地・宮下, 2009) の質問紙、面接法として ASI-J, および、ペアレンティング測定のためにペアレンティング役割面接 (Parenting Role Interview: PRI) (Bifulco, Moran et al., 2009 Bifulco, et al., 2002 (林・吉田(監修), 2016 より引用) の日本語版及び質問紙である肯定的・否定的養育行動尺度 (伊藤他, 2014) を実施した。母親に対する質問紙の中で、婚姻歴、職業、学歴を尋ねる。

**結果****【質問紙調査における量的分析】**

母子ともに質問紙に回答した 169 組のうち、離婚歴のある対象者を除いた 145 名について、NVS の総得点、及び 4 つの下位尺度と KSS 得点の相関分析を行った結果、いずれの組み合わせにおいても有意な相関が見られなかった。児の男女別に分析を行ったところ、女兒に関して NVS の下位尺度である「承認・賞賛過敏性」と KSS 得点との間の負の相関係数が有意傾向であった。

**【面接参加者の質問紙データにおける量的分析】**

ペアレンティング尺度について、肯定的・否定的養育行動尺度の因子分析を行った結果、35 項目のうち「肯定的養育」因子における 8 項目で天井効果が見られ、「否定的養育行動」因子における 12 項目で床効果が見られたため、それらを削除して分析を行った。面接調査に参加した母親のうち、条件を満たす 22 名の母親とその子の質問紙データから、母親の自己愛的脆弱性とペアレンティング、及び子のアタッチメントの安心性得点について相関分析を行った結果、有意な相関が見られなかった。

**考察**

結果より、親の自己愛的脆弱性は子のアタッチメントの安心性に直接関連しないことが確認された。ペアレンティング変数について、肯定的・否定的養育行動尺度について、本研究においては天井効果、床効果が見られる項目が半数以上となり、社会的望ましさが影響したと考えられるため、PRI によるペアレンティング能力の高低を加味してさらに分析を行う必要がある。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 柴原 (2020). 母親の自己愛的脆弱性と子のアタッチメントの関連—ペアレンティング変数を媒介して—【投稿準備中】

④ 柴原 (2020). 母親のアタッチメントの安心性とペアレンティングに関する質的検討  
家族心理学会第 37 回大会 2020 年 9 月 19 日 - 21 日 香川大学【投稿予定】